

特31

345

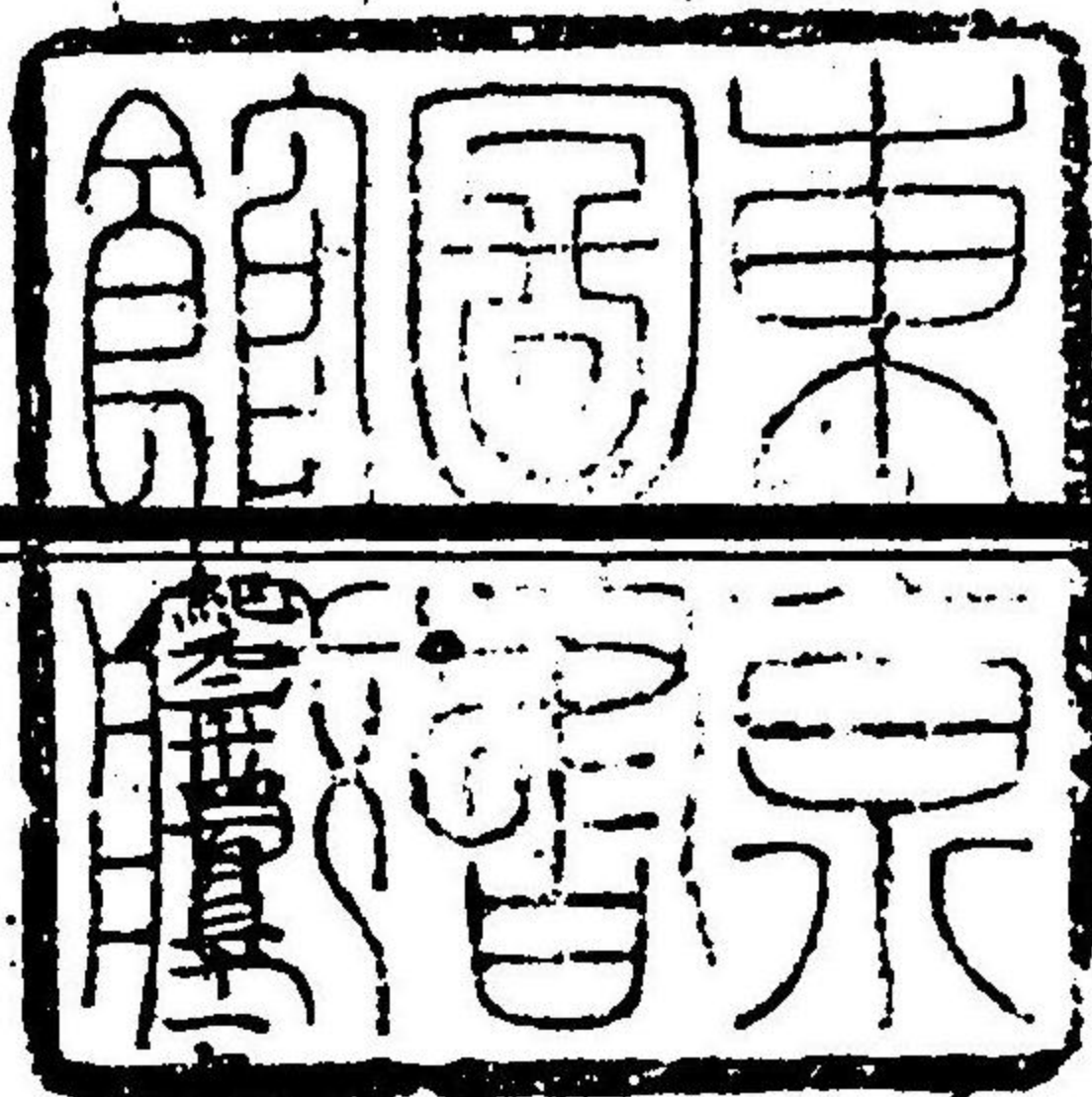
山縣史畧

延藤清石著

長門國之下

六

東 京 圖 書 館				
	七	四		新 書 門
冊	號	架	函	
				部



山口縣史畧卷第六

山口縣士族 近藤清石著

長門國之下

後桃園天皇明和八年十一月朔日阿武郡宇

田村火アリ百十七戸土藏三字山崎
焚死一人及馬一疋漫筆

安永元年重就仰德神社合殿先靈ノ祭典

ヲ修シ元就嚴島戰捷ノ日ヲ以テ永夕祭

日卜定ム故事
年表

二年正月三日萩城三墾内火アリ相社木
工邸

紀元四百三十五年

紀元千四百三十五年

春日神社災ニ罹ル。渡邊年表四月、天樹院ヲ舊

地ニ復ス。故事年表

紀元千四百三十八年

三年、幕府諸侯高壹萬石ニ叔千俵ヲ儲蓄

セシム。渡邊年表六月、防長古器考百六十卷成ル。

本書序

紀元千四百三十七年

四年三月九日、豊浦郡矢玉浦火アリ。百餘戸

渡邊年表

紀元千四百三十八年

七年六月三日、洪水。同上

紀元千四百四十年

光格天皇安永九年五月廿六日、萩城天主閣

ニ震ス。渡邊年表九月、藩士ノ宗門ヲ檢ス。以後

子午ノ歳ヲ大究ト定ム。同上十一月、兩國諸

山ノ境界ヲ檢査ス。同上

天明二年正月廿日、大津郡瀬戸崎火アリ。

六百戸故事年表八月廿一日、重就老ス。男治親嗣

ク系圖

紀元千四百四十年

三年五月廿九日、治親毛利匡芳匡満ノ子五

萬石城主格タラン丁ヲ願フ。允サル。三末年表

紀元千四百四十年

五年二月八日、大津郡通浦火アリ。六十戸土蔵

紀二十四年

九宇社一宇寺堂故事
各一宇焚死一人年表

八年正月四日萩城三墾内妙悟寺火ク邊

紀二十四年

表年

寛政元年六月幕府巡見使石尾七兵衛花房十五郎小濱

平太來ル故事九月幕府諸侯ニ來歲ヨリ

五年間高壹萬石ニ米五十石ヲ儲蓄セシ

ム渡邊十月七日重就三田尻ニ卒ス英雲院

圖系

紀二十四年

二年五月幕府無本寺ノ寺院ヲ録上セシ

紀二十四年

ム渡邊
年表

三年六月十二日治親江戸ニ卒ス容徳院
圖系

七月廿九日男齊房嗣ク同上

紀二十四年

四年三月幕府國目付加藤鞞負近藤三左衛門萩ニ來

ル故事是歲幕府孝人奇特者及ヒ國産藥

品ヲ録上セシム渡邊
年表

紀二十四年

六年萩城天主閣ヲ修理ス故事
年表

紀二十四年

九年有馬哲二亡父喜三太カ手造ノ土圖

ヲ進呈ス齊房之ヲ嘉シ每歲六月永ク有

馬氏ニ拂飾ヲ命ス。喜三太ハモト穴戸氏ノ家人ナリ。畫ヲ雲谷等達ニ學フ。井上親明選舉シテ繪圖方雇トナリ。一村限明細繪圖多ク喜三太カ手ニ成ル。寶曆十二年九月。地理ニ悉シキヲ以テ俸祿ヲ賜ヒ。士籍ニ列シ。郡方定居トナレリ。土圖ハ喜三太カ畢世ノカヲ竭セシモノニシテ。土型ニテ防長ノ地形ヲ糊造シ。劃シテ數區トナス。之ヲ綴合スレハ山川ノ脉理土地ノ

紀三千四百五十九年

高昇。一目瞭然人ヲシテ兩國ノ地ヲ雲際ヨリ下視スルノ想アラシム。有馬家譜土圖

十一年正月廿八日。萩清光寺火ク。渡邊年表三

月十二日。豐浦郡安岡浦火アリ。百餘戶是

月。幕吏日田代官羽倉權九郎勘定平岩右膳俵物糺トシテ

兩國內ノ諸浦ヲ巡回ス。上同

享和元年二月十三日。萩蔵元用紙方火ク。上同

紀三千四百三十五年

三年正月。山縣英俊没ス。四十七歲英初ノ永蔵

ト稱シ。鶴江ト號ス。毛利

外ノ家人ナ

リ。書畫ヲ能スルヲ以テ天明八年士雇ト

爲リ。後譜代ニ列セリ。分限帳是歲明倫館

ヲ修理ス。渡邊年表

紀千四百六十年

文化元年九月。幕府諸侯高壹萬石ニ叙シ

俵ヲ儲蓄セシム。同上

紀千四百六十五年

二年九月。幕府更ニ儲蓄ヲ命シ。前年ニ合

セテ壹萬石ニ二千俵トス。同上十二月。野村

某吉兵衛江戶ニ没ス。某紫澤ト號ス。擊劍ヲ

紀千四百六十六年

能クシ。丹青ニ工ナリ。擊劍ハ岡田重松ヲ
師トシ。丹青ハ谷文晁ニ學フ。享年總ニ二
十八歳。二師深ク其ノ夭死ヲ惜ムト云フ。

分限帳
真跡

三年四月。幕吏伊能勘解由來リ兩國ノ海

岸ヲ測量ス。六月ニ至テ終ル。渡邊年表十一月

八日。長府火アリ。三末年表

紀千四百六十七年

四年六月廿五日。萩洪水。渡邊年表

紀千四百六十八年

五年四月阿武川ヲ浚フ。同上是歲萩城ヲ修

理シ。臺所門向櫓ヨリ潮留門ノ間ヲ粉壁

トス。故事年表

紀千四百十九年

六年二月十四日。齊房卒ス。靖恭院齊熙嗣シ。

系十二月。伊能勘解由再下シ。兩國ノ南郡

ヲ測量ス。帳日

紀千四百二十年

七年六月十四日。阿武郡河上村ノ舟人強

訴ス。是ノ事タル萩橋本町ノ酒家吏ニ因

縁シ。水車ヲ阿武川ノ太甲菴堤ニ設置ス。

舟人水路ヲ妨ケラル、ヲ以テ之ニ及ヘ

紀千四百二十一年

リ。仕置帳渡十月。幕府諸侯高壹萬石ニ叙

千俵。若クハ米五百俵ヲ儲蓄セシム。渡邊年表

八年正月。伊能勘解由復來リ。國內ヲ測量

ス。上同八月。幕府儲蓄ヲ命ス。其額客年ノ如

シ。上同

紀千四百二十二年

九年十一月七日。豐浦郡湯玉浦火事。戸百

餘。上同

紀千四百二十三年

十年三月十六日。河島莊河島樋口火アリ。

延テ萩御許町ニ至ル。四百餘年表。燒失繪圖。故事。渡邊年表。

紀平寶正五年

十二年正月三日。秋風雪。中渡川渡舟覆没。

廿二人溺死ス。救邊年表

紀平寶正六年

十三年。秋城ニ震ス。渡邊年表六月阿

武郡椿郷東分小畑ニ二孝子碑ヲ建ツ。二

孝子兄ヲ權蔵ト云ヒ。弟ヲ利吉ト云フ。父

長七三男アリ。妻仲ヲ生テ死ス。繼娶シテ

季ヲ生ム。乃チ利吉ナリ。又女ヲ生ムテ病

△湯藥効ナシ。死ニ瀕ス。一日權蔵利吉ニ

謂フテ曰ク。今ヤ計窮術盡此ヨリ以徃ハ

唯神ノ冥助ヲ仰クノ外ナシト。利吉喜シ

テ。兄ノ言ニ從ヒ。其日ヨリ穀ヲ斷チ。七日

ヲ期シテ。款新堀ノ金比羅社ニ祈ル。期滿

ルノ日。沐浴裸跣。社ニ詣ツ。茲夜烈風雨雪。

隣人之ヲ止ム。兄弟言フ。如此或ハ神ヲ感

スルニ足ルヘシト。死ヲ矢フテ出ツ。果シ

テ歸途ニ斃ル。實ニ客年十二月十一日ノ

事ニシテ。權蔵二十二歳。利吉十六歳ナリ。

賞例ニ照シテ。米若干ヲ賜フ。齊熙深クニ

子力孝ニ命ヲ殞シ、ヲ憫ム。遂ニ此事了

リ。二孝子是歲、萩弘法寺原ニ演劇場ヲ建

ツ。故事年表

紀三千四百七十年 仁孝天皇文化十四年十月。是ヨリ先キ厚狹

郡妻崎ニ開作ス。コ、ニ至テ成ル。渡邊年表

紀三千四百六十年 文政元年正月八日。大津郡瀬戸崎火アリ。

四百戶上同四月六日。萩濱邸火ク。上同

紀三千四百五十年 二年正月十六日。萩城三郷内火アリ。福原豊前

邸。同上。及故

事年表

紀三千四百八十年

三年十一月廿七日。風雪。渡邊年表

紀三千四百八十年

四年七月。阿武大津二郡洪水。上同

紀三千四百八十年

五年十二月九日。大雪。道路阻絶ス。故事年表

紀三千四百八十年

六年三月二日。清未藩邸火アリ。渡邊年表 十二

月十一日。阿武川松本川氷結フ。故事年表 是歲

疫癘。同上

紀三千四百八十年

七年三月廿七日。齊熙老ス。齊元嗣ク。系十

二月十三日。赤間關伊崎新地火アリ。渡邊年表

紀三千四百八十年

八年六月。萩及ヒ諸郡洪水。同上 八月朔日。萩

城三郷内益田

進尹之ノ邸火ク所藏定

家ノ色紙災ニ罹ル

同上及今

是月連年豊

熟ナル或ハ凶歟ノ近キニ有ランヲ恐レ

各人豫備ノ法方ヲ印刷シテ兩國内ニ頒

布ス銅版豫備法

十一年八月九日大風雨

渡邊年表

十二年五月七日美禰郡大田市火アリ八百

十三同上六月十七日阿武郡玉江浦火アリ

百八十四同上十一月款仰徳神社ニ正二位

紀元四百八十八年

紀元四百九十九年

ノ宣下アリ同上

紀元四百九十九年

天保元年四月八日厚狹郡埴生浦火アリ

百六十同上六戸

紀元五百九十五年

二年八月八日當職毛利房輯藏主免ス益田

元宣播磨之二代ル佐波吉敷二郡ノ農民蜂

起スルヲ以テナリ仕置帳郡方年表

十六日先大

津宰判新別名ノ農民蜂起ス前大津美禰

吉田船木當島奥阿武等ノ諸宰判ニ波及

ス廿九日ニ至テ鎮静ス仕置帳十二月三日

紀元四百九十三年

幕府新田石高ヲ録上セシム。書付

四年二月朔日豊浦郡島戸浦火アリ。百十

社二字納渡邊屋十二字五月朔日安岡浦火アリ。百

餘同上六月幕吏普譜夜助俵物糺トシテ兩

國內諸浦ヲ巡回ス。同上

七年五月十四日齊熙江戸ニ卒ス。清徳院

六月十二日阿武川洪水大橋墮ツ輝元築

城以後ノ大水ナリ。敬親事跡九月八日齊元

卒ス。邦憲院十二月十日養子齊廣嗣ク。系圖

紀元四百九十六年

紀元四百九十七年

八年三月十七日齊廣江戸ニ卒ス。崇文院

廣謹厚學ヲ好シ事斯語二冊ヲ著ス人其

ノ早世スルヲ惜ム。系圖四月廿七日敬

親嗣ク後慶親ト改ム。系圖敬親事跡

九年三月十一日萩火アリ。邸

渡邊年表五月幕府巡見使諏訪總殿來ル。敬親

是月疫癘萩滿願寺ヲシテ祈攘セシム。同上

十月廿九日豊浦郡安岡浦火アリ。二百十

紀元四百九十八年

紀元四百九十九年

渡邊年表 十二月晦日長府船廠火ク。同上

十年秋旱且蝗アリ。禾稼ヲ損ス。

紀元千五百年

十一年正月三日長府ノ清末藩邸火ク。渡邊

表年 五月慶親城内東苑ニ田ヲ開キ稻ヲ植

工民勞ヲ嘗ム。秋收ニ及ヒテ米三斗七分

ヲ獲ルト云フ。今村手扣八月藩士妻女ノ衣装

男子ニ準シテ綿服トス。敬親事跡九月萩南苑

火ク。渡邊年表

紀元千五百年

十二年四月十七日萩城臺飯所火ク。同上及見

開志十月十四日幕府本年ヨリ五箇年間諸

侯高壹萬石ニ叔百俵ヲ儲蓄セシム。渡邊年表

是月幕吏勘定高橋平作國內諸浦ヲ巡回ス。同上是

歲始テ藩士ニ劔槍試合稽古ヲ命ス。敬親事跡

赤間關伊崎ハ幡改方拔買改方トモ云フ。創置ノ年月未詳。

ヲ廢シ伊崎ノ地ヲ吉田宰判ニ隸ス。

紀元千五百三年

十三年正月諸宰判ニ命シ風土志ヲ編輯

セシム。故事年表六月萩橋本町松本口平安古

中渡高麗峠及ヒ鶴江ニ望火樓ヲ増設ス。

紀元五百三年

同是歲藩内ノ淫祠ヲ廢ス。渡邊年表

十四年四月朔日慶親阿武郡黑川村ハゴ

臺ニ野習調練ス。兵員壹萬三千九百六十人馬五百三十四疋

一録件是月寺社奉行口羽元寔善九師飯田

小右門郡シテ淫祠ヲ檢ス。一録件十月十

五日椿郷東分小畑浦火アリ。六十戸故事年表渡邊

年表

紀元五百四年

弘化元年八月慶親會津藩士志賀重則小

即ヲ招キ藩士ニ槍術ヲ學ハシム。敬親事跡十

紀元五百五年

二月縹寡孤獨廢疾ノ民ヲ賑恤ス。書付和

二年四月夜大津郡神田下村ノ海風

浪翌日鍋島ノ磯ニ四尺許ノ石見ル海藻

及ヒ貝殼ノ紋アリ。風土註進案

三年四月九日八幡改方ヲ復ス。廿三

日將軍家慶慶親ニ家督以來ノ治績ヲ賞

シ鞍鐙ヲ賜フ。敬親事跡

紀元五百七年

孝明天皇弘化四年正月十六日厚狹郡蒔屋

浦火アリ。二百九戸渡邊年表

紀元五百九年

嘉永二年正月廿六日。是ヨリ先キ明倫館

ヲ新堀ニ新建ス。コ、ニ至テ成ル。二月十

八日。釋典ヲ修ス。慶親學生ニ列シテ自ラ

獻饌ス。事敬親跡親九月廿二日。豐浦郡湯玉浦火

アリ。三百十三年表十一月。慶親始テ引痘セシ

ム。敬親事跡

紀元五百二年

三年六月朔日。萩大風雨。二日。指月山南麓

崩ニ。洞春寺ノ客殿ヲ壞ツ。同上七日。兩國大

風雨洪水。禾稼ヲ損シ。人蓄ヲ殺ス。死七五人

紀元五百二年

被傷三百十人。牛馬十九疋。流死。同上及扣書

四年六月五日。澁谷道勝源没ス。六十道勝

亦名ハ章年甫十歳。齊房ノ近侍トナル。文

化六年。齊房卒シテ。後武具方檢使トナリ。

上勘究役等ヲ經テ。終ニ代官ニ至ル。道勝

丹青ヲ縣英ニ學ヒ。長南又華岳ト號ス。花

弁翎毛ニ工ナリ。分限帳十二月廿七日。林

靖真没ス。五十靖字ハ不遑一。字ハ愚公。百

非ト號ス。本莊原氏出テ。林氏ヲ襲ク。山

紀二十五百五章

鹿氏ノ兵書ニ通ス。傍ラ禪學ヲ喜ヒ。畫山	水ヲ善クシ。門人ニ石川復 <small>復藏。瓊州。號ス。</small> 林茂	與一兵衛。停 <small>號ス。</small> 佐伯敬 <small>驪八郎。圭。號ス。</small> 及ヒ匪石 <small>負</small>	衛内名アリ。 <small>分限帳。真跡。</small>	伊藤藤亮	安政元年二月。慶親毛利元蕃ノ身。驛尉ヲ	養子トス。廣封ト名ツク。後定廣ト改ム。 <small>親敬</small>	跡 <small>事</small> 五月廿一日。冷泉古風 <small>護没ス。四十五歲。</small> 古風	本莊原氏林靖ノ第十リ出テ、冷泉氏ヲ	襲ク。和歌ヲ善クス。遠祖大夫判官隆豐歌
---------------------	--	--	-------------------------------	------	---------------------	---------------------------------------	---	-------------------	---------------------

紀二十五百五年

名アリ。其ノ太寧寺ニ殉スル時ノ詠人口	ニ膾炙ス。古風其後ヲ承ルヲ以テ。頗ル歌	學ニ刻苦セシト云フ。 <small>分限帳。遺稿。</small>	二年三月。慶親海防ノ事ヲ以テ。參府延期	ヲ願ヒ。九月三日ニ至テ。東上ス。 <small>敬親。事跡。</small> 六月	十五日。村田清風 <small>織部。没ス。三十七歲。</small> 清風人トナ	リ弘毅俊爽。學定主スル所ナシ。經世ヲ以	テ志トス。年甫十七。齊房ノ近侍ト爲リ。幾	ハクナクシテ。密用方右筆トナル。文政七
--------------------	---------------------	-----------------------------------	---------------------	---	---	---------------------	----------------------	---------------------

年當職年元役ニ擢ラレ。八年郡奉行ヲ兼
 又。務メテ積弊ヲ一洗セントス。而シテ東
 風因循議多ク合ハス。職ヲ解ニ丁ヲ請フ。
 允サレシ。十年固辭ス。居ル久シカラス。又
 矢倉方頭人トナル。コレヨリ多ク要路ニ
 在リ。弘化二年老シテ大津郡三隅ノ舊居
 ニ還リ。居宅ヲ以テ文武講習所ニ充テ。子
 弟ヲ教育ス。家固リ蔵書ニ富ム。其書籍ニ
 集散任天然永爲四海寶ノ印ヲ捺ス。嘉永

元年慶親大ニ學制ヲ改ム。乃チ清風ヲ起
 シテ明倫館再興用掛トス。數月疾作り舊
 里ニ還ル。二年慶親清水信篤新三口羽元
 寒善九等ヲ連進シ。大ニ政治ヲ張ル。清風
 ヲ起シテ之ニ參セシム。清風疾ヲカメテ
 召ニ應ス。慶親優待。乘輿城中ニ入ルヲ許
 シ。特ニ城内ニ憩息ノ所ヲ設ク。己ニシテ
 故疾復發リ。萩ニ終ル。分限帳忠八月廿八
 日。明倫館祭酒山縣禎半致仕ス年七十五。

紀三十五百六年

後數年ニシテ没ス。禎字ハ文祥。太華ト號ス。周南ノ遠裔ナリ。著ニ國史纂論アリ。世ニ行ハル。分限帳見聞誌十二月廿日。姥倉新川成ル。是ヨリ先キ萩松本水害多キヲ以テ。椿郷東分村ノ姥倉ヲ穿テ。松本川ノ下流ヲ小畑ノ海ニ注カシム。嘉永五年功ヲ起シ。四歳ニシテ成レリ。敬親事跡

三年二月十九日。布施御牆虎之助没ス。八歳御牆人ト爲リ。順良毛利氏ノ典故ニ通シ。

紀三十五百七年

和歌ヲ能クス。檢使ヨリ遂ニ地方右筆ニ至ル。姥倉ノ工事起リテ之ヲ督スル甚クカトム。功成リテ賞ヲ受ルニ及ハスシテ没ス。人ノ之ヲ惜ム。分限帳見聞誌九月。慶親吉川經幹ヲ徵シテ海防ノ事ヲ議ス。十八日出萩。廿八日還ル。江風山月書樓記見聞誌十二月。西洋式風帆船ヲ小畑浦ニ製造ス。翌年二月成ル。丙辰丸ト名ツク。敬親事跡願出扣

四年二月。慶親僧侶ノ宗學不研。且ツ其躬

行嬾墮ナルヲ責ム。敬親事跡令春復海防ノ事
 ヲ以テ参府延期ヲ願ヒ。三月朔日萩ヲ發
 シ。南郡海岸ヲ巡視シ。四月三日還ル。上同九
 月五日東上ス。上同是秋霍亂病流行。彗星西
 南ニ見ル。光芒頗ル長シ。年表是歲大津郡角
 山村宮番幸吉カ寡婦登波及ヒ其ノ幸吉
 ヲ良民籍ニ編ス。登波父ヲ甚兵衛ト云フ。
 モト播磨ノ農夫ナリ。流離シテ赤間關ニ
 來リ寓ス。二女一男アリ。長女即チ登波ニ

テ。幸吉ニ嫁ス。妹ヲ松ト云フ。賣ト及ヒ擊
 斃ヲ業トスル石見浪人枯木竜之進ナル
 者ノ妻トナレリ。甚兵衛幸吉貧ニ迫リ。幸
 吉ハ川尻村山王社ノ宮番トナリ。甚兵衛
 ハ豊浦郡瀧部村八幡宮ノ宮番トナル。文
 政四年ノ春。竜之進妻松及ヒ前妻腹ノ女
 子ヲ幸吉ニ托シ。九州ニ赴キ。十月ニ至テ
 還リ。妻松ヲ離別セント幸吉ニ告ク。是時
 松父ノ家ニ在リ。幸吉竜之進ヲ伴ナヒ瀧

部ニ赴ク。竜之進女子ヲ粟野川ノ渡子ノ家ニ預ケテ到ル。其夜竜之進甚兵衛及ヒ松其弟勇助并ニ幸吉ヲ斫リ。女子ヲ捨テ道ル。勇助ハ即死シ。甚兵衛松ハ重創ニテ斃ル。幸吉獨リ死セストイヘ氏。是ヨリ癩痢病ニ卧ス。登波之ヲ介抱スル丁五年ヲ閱シテ。幸吉ノ病ヤ、瘳ルヲ見復讎ノ志ヲ告ク。幸吉之ヲ死ス。是ニ於テ登波山陰ヨリ若狹ニ出。五畿及ヒ播磨ヲ探リ。木曾

路ヨリ常陸ニ到リ。筑波郡岩柴村ニテ市右衛門ナル者ノ家ニ宿リ。病ニ罹リテ將ニ死セントス。市右衛門之ヲ憐ニ療養セシムル丁殆百日。病漸ク愈ルヲ以テ房総ヲ巡リ。市右衛門カ恩ニ答ユヘキカタノ復岩柴ニ還リ。市右衛門カ家ニテ農事ヲ助クル丁一兩年ニシテ。東海道ヲ上リ。紀ヨリ四國三備ノ地ヲ盡ストイヘ氏。猶竜之進カ所在ヲ知ラス。初メ登波ノ岩柴村

ニテ死ニ瀕セシ時、市右衛門ニ復讎ノ念アリテ、達スルヲ能ハサルヲ告ケシカハ、市右衛門大ニ之ヲ感シ、出立スル時旅費ヲ惠ミ、且ツ市右衛門カニ男龜松任俠義ニ勇ムノ男兒タルヲ以テ、是ニ至リ復岩柴ニ赴キ、前年ノ恩ヲ謝シ、且ツ龜松ニ加援ヲ依頼ス。龜松其志ヲ壯ナリトシ、肯テ辭セス。登波ヲ伴ナヒ、常武及ヒ北國ヲ探索シ、京師ニ上リ、マタ紀ヨリ四國ニ濟リ、

コレヨリ安藝ニ還リテ、高田郡吉田ニ抵リ、始メテ竜之進ハ備後國三次ノ屠者ナルカ、今ハ三次ニ在ラス。蓋シ其娘ニ依リ、豊前彦山ニ在ルヘシト聞ク。因テ三次ノ竜之進カ兄ノ家ヲ窺フ。了數日、果シテ竜之進カ在ラサルヲ以テ、款ニ還リ濱崎町目明與ハニ就テ報讎ノ事ヲ願フ。與ハ大津郡目明ニ就テ願フヘキヲ諭ス。因テ故里ニ還ル。是ヨリ先キ幸吉モ仇ヲ探ルヘ

キカ爲ニ他行シテ死亡シ、居宅破壊更ニ住スヘカラサレハ、角山村目明松五郎カ家ニ寄食ス。既ニシテ登波事ノ速ニ行ハレサルヲ以テ、自ラ彦山ニ赴ク。是時與ハカ上申スル所ヲ以テ、政府代官ニ命シテ之ヲ抑留セシメ、竜之進ハ政府ヨリ捕縛スヘキ由ヲ諭シ、龜松ニ金若干ヲ賜フテ常陸ニ還ラシム。是ニ於テ政府吏ヲ差シ、與ハ松五郎ヲ附シテ彦山ヲ探ラシム。果

シテ竜之進カ瀧部ヲ遁ル、時粟野川ノ渡子ノ家ニ遺シ、女子彦山寶藏坊ノ妻トナリ、竜之進ハ名ヲ佐竹織部ト改メ、時時來リ寶藏坊ヲ訪フ、了ヲ知ル、因テ與ハ等彦山地方ノ目明ニ竜之進カ來ルヲ待テ報道スヘキヲ托セシカ。天保十二年三月十日、彼地ヨリ竜之進ヲ捕縛セシト告クルヲ以テ、政府直千ニ吏及ヒ檢斷人ニ目明ヲ附シテ差遣セシニ、十四日ノ夜竜

之進脱走シテ自殺ス。乃チ其死骸ヲ收メ
 テ歸國シ獄ニ下シ。十二月廿日大谷ノ法
 場ニ斬リ。首ヲ瀧部ニ梟ス。是ニ於テ登波
 カ名遠邇ニ喧シ。代官其行状ヲ上申ス。慶
 親感賞シ。終身扶持米ヲ賜フ。登波是時四
 十三歳。鶴成ト云フ兒ヲ養子トシ。翌年之
 ヲ伴ヒ龜松父子ニ宿志ヲ達セシヲ告ク
 ヘキカ爲ノ岩柴ニ抵ルニ龜松父子既ニ
 死セシヲ以テ。其墓ニ典シテ歸國スト云

寛平五年十八年

フ。安政三年米ヲ賜ヒ。門閭ニ旌表ス。コ、
 ニ至テ此特典ヲ辱フセリ。賞譽書拔
樂浪物語
 五年五月廿三日。慶親忌服ノ制ヲ嚴ニシ。
 奪情從公ノ舊慣ヲ停止ス。敬親
事跡秋。霍亂病
 流行ス。年表粟屋俊則新之没ス。俊則擊
 劔ヲ善クシ。傍ラ和歌ニ工ニシテ語學ニ
 涉リ。富士谷御杖カ説ヲ悦フ。近藤芳樹ニ
 贊ヲ執ラスシテ當時ニ名アル者。獨リ俊
 則ノミ。見聞
誌八月。慶親幕府ニ公武一和ノ

建白書ヲ上ル

和書付

廿一日。關白鷹司輔熙

我藩人ノ歸國スル者ニ托シ。内勅ヲ慶親

ニ傳フ。九月周布翼

政之助。後麻田公輔ト改ム。

ヲ京師

ニ上シ。内勅答ヲ上ル

敬親事跡

十一月七日。藩

士ノ養子血胤ニ求ムヘキヲ命ス。上同 廿一

日。毛利元潔

出雲

ヲ江戸ニ差遣シ。公武一和

論ヲ策ス。

上同

紀元千五百九年

六年二月。西洋學校ヲ増建シ。來原盛吉良

等ヲ長崎ニ差遣シ。西洋銃陣ヲ傳習セシ

ム。上同 夏霍亂病流行ス。

年表

七月廿六日。定廣

始メテ江戸ヨリ至ル。

敬親事跡

八月廿一日。寺

社奉行口羽親之

德祐没ス。

二十歳親之初名ハ

希琦。宋ノ韓琦カ人ト爲リヲ慕フテ自ラ

命スル十リ。後慶親ノ偏諱ヲ賜ヒ。今ノ名

ニ改ム。憂菴。又枇杷山人ト號ス。年甫十四

國學ニ入ル。十八疾ヲ以テ家ニ歸養ス。尋

テ愈ユ。會慶親俊秀五人ヲ選ミ。關左ニ遊

學セシム。親之其選ニ當ル。贄ヲ羽倉用九

記外ニ執ル用九親之ノ人ト爲リヲ愛ル人
 ニ詔リ曰ク少年重厚ニシテ才氣アル者
 長門ノ口羽生吾其ノ比ヲ見スト後昌平
 學ニ入り旁ヲ安積信助藤森大雅恭ノ門
 ニ游フ是ニ於テ學殖文辭大ニ富ム居ル
 二年父元寔致仕ス因テ國ニ歸リ其家督
 ヲ承ク吉田矩方ト意志契合矩方著述ス
 ル所アル必ス之ヲ親之ニ送致シ其論ヲ
 叩ク安政五年八月寺社奉行トナル質性

紀二千五百十年

儉素家固ヨリ負債多シ親之敢テ意トナ
 サス家宰ニ言フテ曰ク淡食薄衣歳ヲ積
 テ償フヘシ如此乃チ驕奢ニ失スルノ患
 ナント故ニ官ニ居ル清介ヲ以テ世ニ賞
 セラル忠節事 跡稿十月軍政ヲ改革ス敬親 事跡廿
 七日幕府吉田矩方ヲ江戸ニ殺ス忠節事 跡稿
 十二月十六日慶親中將ニ任ス敬親 事跡
 萬延元年三月廿八日定廣江戸ニ赴ク同上
 八月萩城西濱ニ訓練場ヲ設ク同上九月學

制ヲ改革ス。同上庚申艦ヲ造ル。翌年七月ニ

至テ成ル。忠節事 稿是歳厚狹郡妻崎ニ開作

ス。百廿敬親 跡靜間三積衛没ス。八十三積ハ

先午足輕ナリ。本居大平ノ弟子ニシテ。國

學ニ長シ。和歌ヲ能ク。冷泉古風勝間田

盛稔權左衛門等皆先進ヲ以テ三積ヲ推ス。近

藤芳樹モ始メハ三積ニ學ヘリ。三積南朝

ノ事ニ注意シ。新葉集ヲ校正シ。補遺及ヒ

作者履歷ヲ著ス。稿ヲ脱スルニ及ハスシ

紀二千五百五年

テ没ス。見聞誌 遺稿

文久元年二月。慶親海軍局ヲ創置ス。敬親 跡

三月廿八日。長井時庸雅ヲ京師及ヒ江戸

ニ差遣シ。公武一和論ヲ策ス。同上。及 書付四月

五日。慶親款ヲ發シ。赤間關及ヒ周防海岸

ヲ巡視ス。五月十一日還ル。敬親 跡六月八幡

改方ヲ都合役坐ト改稱ス。九月十六

日。慶親江戸ニ赴ク。十八日都濃郡福川村

ニ次ス。眩暈ヲ患ヒ途ニ上ル丁ヲ得ス。廿

二日ニ至リ花岡ニ進ム。病復發ス。十月四

日ニ及ヒテ漸ク途ニ上ル。敬親十二月十

六日。定廣少將ニ任ス。上同是歲幕府吏ヲ英

國ニ遣ハス。慶親叔重華。德輔後孫七ヲシ

テ之ニ隨行セシム。上同

紀二千五百五十年

二年春。幕府吏ヲ支那ニ遣ハス。慶親高叔

春風。晋ヲシテ隨行セシム。八月反命ス。忠節

事跡中谷實之。正亮江戸ニ没ス。三十實之字

ハ賓卿。初名松之助。少小ヨリ捕正成諸葛

亮ヲ欽慕ス。遂ニ正亮ト改ム。其師吉田矩

方名字説ヲ作り之ヲ戒勵ス。資性寛ニシ

テ剛能ク親ニ仕フ。父没スル墓ニ哭スル

丁三年一日ノ如シ。服闋リ遊學交ヲ豪俊

ニ結フ。其志矩方ノ業ヲ繼クニ在リ。尊攘

ノ事漸ク起ルニ及ヒテ。久坂通武等ト京

師ニ在リ。書ヲ大原實徳ニ呈シ謁ヲ乞フ。

實徳延見シ我藩老臣某等ノ事ヲ問フ。實

之其言ヲ矩方ニ報ス。矩方乃チ時勢論一

篇ヲ作り、實之等ヲシテ實徳ニ上ラシム。事洩レテ達セス、實之尋テ國ニ歸ル。當時京師ニ在テ鞅掌スル者、實之ヲ以テ巨摩トス。慶親命シテ東上セシム。時ニ實之病ニ卧ス。命下ル疾ヲ力メテ起ツ。江戸ニ至ルニ及ヒテ病革リ、竟ニ死ス。上同九月、火輪船ヲ購ス。壬戌、丸ト名ツク。上同小田海儼良是年ヲ以テ京師ニ没ス。七十海儼名ハ王瀛字ハ巨海、海儼ハ其ノ號ナリ。豐浦郡赤

聖子書于三年

間關ノ人、初メ畫ヲ吳春ニ學ヒ、南豐ト號ス。後舊習ヲ舍テ、專ラ元格ニ効ヒ、號ヲ百谷トス。遂ニ今ノ號ニ改ム。善畫ヲ以テ當世ニ聞ユ。其門ニ遊フ者、羽ハカ樣師古宗四郎、巧ヲ以テ巨摩トス。見聞誌 真跡三年正月十七日、慶親參議ニ進ム。敬親 事跡二月六日、長井時庸ニ自盡ヲ命ス。是ヨリ先キ慶親上書大ニ時勢ヲ論ス。幕府未夕報セス。慶親老中久世廣周大和ニ時勢ヲ面

議ス。廣周教ヲ請フ。慶親其要京師ノ情ヲ
審カニスルニ在トシ。因テ時庸ヲ薦ム。廣
周等乃チ時庸ヲ召シ。款接事ヲ謀ル。時庸
方今ノ策タル。開港ニ在テ。鎖國ニ在ラス
トス。其ノ見大ニ幕旨ニ合フ。因テ内旨ヲ
授ケ。二年四月京師ニ説カシム。時庸京師
ニ上リ。書ヲ議奏。中山忠能ニ呈シ。持論ヲ
具陳シ。並ニ慶親ノ志ヲ申説ス。是時ニ當
リ。諸藩慷慨激烈ノ士。輦下ニ輻湊シ。盛ニ

尊攘ノ議ヲ唱フ。交時庸ヲ咎ム。時庸言ノ
輒ク行ハレ難キヲ度リ。命ヲ待スシテ東
歸ス。我藩ノ少壯輩首トシテ之ヲ大津驛
ニ要撃セントス。時庸之ヲ覺リ。道ヲ中山
道ニ取リテ免カル。是月。定廣國ニ就ント
ス。京師ヲ過ク。朝旨之ヲ留メ。輦下ニ宿衛
セシム。忠能内旨ヲ奉シ。定廣ニ時庸カ嘗
テ呈セシ書中。朝議ヲ謗訕スルカ如キ辭
アルヲ問フ。蓋シ慶親ノ意ニ出ツルヲ疑

フナリ定廣之ヲ慶親ニ報ス慶親驚愕深
 ク時庸カ自己ノ意見ヲ恣ニセシヲ責メ
 國ニ還シテ謹慎セシム尋テ慶親詔ヲ奉
 シテ江戸ヨリ入朝シ輦下ニ駐リ時庸カ
 過ヲ謝ス開港ノ議固リ慶親ノ意ニ出ル
 ニアラサルヲ以テ事乃チ氷釋ス而レモ
 猶時庸ニ死ヲ以テ取慮ヲ悩マシメ罪ヲ
 謝セシム時庸通稱雅樂人ト爲リ英敏果
 斷舉止嚴肅ニシテ眇視能辨威容アリ俚

俗本國ノ人眇目ニ英邁多シトス時庸ニ
 接スル者雅樂其人ナリト云フ天保九年
 慶親ノ近侍トナリ嘉永三年奥番頭ニ進
 ミ學校内用掛ヲ兼ヌ四年定廣ノ傳トナ
 ル安政五年直目付ニ轉シ文久元年記録
 所頭人ヲ兼ヌ死スル日通稱ヲ右近ト改
 ム時二年四十五歳ナリ
仕置帳忠節事
跡稿見聞誌 十
 二日慶親京師ヨリ至ル敬親是月吉川氏
 ヲ支藩ニ准シ經幹ノ末子長吉ヲ養男ト

ス系圖

三月當職ヲ廢シ加判老中ヲシ

テ當職ノ事務ヲ執ラシメ之ヲ政事方ト

為ス敬親四月七日射術ヲ廢シ馭法ヲ改

革ス敬親十四日沿海ノ警備ヲ預定ス

是月定廣京師ヨリ至ル敬親五月十日

米利堅合衆國船赤間關ニ來ル是ヨリ先

キ天朝及ヒ幕府ヨリ本日ヲ以テ攘夷期

限トスルノ命アリ因テ庚申癸亥兩艦夾

撃シテ之ヲ走ラス同上及忠茲夜中島嘉

勝名左赤間關ニ暗殺セラル忠節事廿二

日佛蘭西國汽船來リ赤間關ヲ襲フ前田

壇浦故谷龜山等ノ諸砲臺及ヒ庚申癸亥

合撃之ヲ却ソク其ノ小舸壹隻ヲ奪フ同上

廿四日夷艦茂島沖ヲ過ク之ヲ砲ス同上廿

六日荷蘭國軍艦來襲ス庚申癸亥兩艦之

ト戦フ敬親廿七日定廣萩ヲ發シ赤間關

ニ赴ク三十日茂島ニ渡リ砲臺ヲ檢ス同上

及藏田郡奉行ヲ廢シ代官ノ名ヲ郡奉行

ト改ム。是月慶親幕府ニ周防山口ニ

移居セシ事ヲ願ヒ藩士ニ隨意土著ヲ許

ス。敬事跡記六月朔日定廣庫申艦ニ駕シ赤間

關ヨリ將ニ小郡ニ歸ラントス。時ニ米利

堅軍艦來襲ス定廣上陸ス米艦庫申主成

兩艦ノ間ニ突入シ兩艦ヲ砲ス庫申其ノ

破ル所トナリテ沈没シ主成暗礁ニ膠シ

汽罐破レ水夫三人焼死シ十三人傷ツク

南部町ノ市倉流彈ノ焼ク所トナル。同上及志

跡事三日定廣山口ニ還ル。蔵田五日佛蘭

西國軍艦二隻來リ前田ヲ砲ス砲臺之ニ

答フ敵彈我礮口ヲ剷リテ山内通喜賢之

カ額ヲ碎ク彼專ラ慈雲寺ヲ注射ス遂ニ

其ノ焚ク所トナル彼之ニ乘シテ上陸ス

我兵其ノ鋒ヲ茶臼山ニ避ケ戰フ利アラ

ス水夫二人之ニ死シ隊卒一人水夫一人

傷ツク佐々木滿堯又四及ヒ山田某源其ノ獲ル所トナラシヲ恐レテ自殺

ス。彼我砲臺ニ登リ器械ヲ焚毀シ。且民屋
 ニ放火シ物ヲ掠ム。我兵返戦六七人ヲ殪
 ス。既ニシテ日暮レ。敵船ニ衆シテ去リ。豊
 前袖浦ニ泊シ。翌朝退帆ス。茲日兵燹ニ罹
 ル民屋十餘宇ニシテ。老髡遁ル。能ハサ
 ル農夫一人其ノ殺ス所トナレリ。敬親事 跡忠節
稿事跡慶親高叔春風晋ヲ赤間關ニ差遣ス春
 風建議シテ奇兵隊ヲ編ス。忠節事 跡稿七日夷
 艦黒井洋ニ碇ス。十日。茂島洋ヲ過ク之ヲ

砲ス。十一日。長府沖ニ來ル。戦ニ及ハスシ
 テ去ル。同上十五日。天皇勅書ヲ慶親ニ賜ヒ。
 攘夷期限ヲ愆ラサルヲ褒ス。敬親 事跡十八日。
 慶親益田親施彈正。後右衛門。介ト改ム。ヲ京師ニ差遣
 ス。父子連名ノ書ヲ賜フ。其書ニ曰ク。一外
 夷へ對シ。既ニ兵端ヲ開キ候ニ付。乍恐御
 親征石清水へ出御シ。諸國へ勅ヲ降シ給
 ヒ。勤王ノ兵ヲ召集ヲラレ。御指揮ヲ以テ
 掃攘仰付ラレ。大樹公ニ於テモ掃攘ノ事

業在セラレ度候事。一皇太子ヲ立サセラ
 レ。堂上方ニテ人才御撰舉アリテ。御補佐
 被仰付度候事。附中山忠能此内歸洛ニツ
 キ。御補佐ノ任可然故申立ノ事。附立太子
 一條ニ付。御失費御縁卷御ムツカシク候
 ハ。獻金可致候間。其筋可承合事。一還勅
 ノ幕吏并ニ諸侯押テ上京候ハ。再三教
 諭ヲ加ヘ。若理不盡ニ申募リ候ハ。勤王
 ノ諸侯申談シ。勅命ヲ請ケ。天罰ヲ加ヘ候

様可致候尤同志ノ諸藩無之候共。我等父

子ノ名代トシテ監物差登置候

吉川經幹
ナリ上京

ノ月日詳
ナラス

ニ付申合セ。此方一手ヲ以テ勅

命ヲ請ケ候様可致候。右之條々大意ノ處

申渡候条。兼テ我等父子ニ於テハ朝廷へ

忠節相立候ヘハ。幕府へノ信義祖先へノ

孝道モ隨テ相立候義ト存込居候趣。委細

承知ノ通ニ付。其旨ニ相叶候筋ニ候ハ。

右三箇條ノ外ニテモ見込次第伺ニ及ハ

ス監物申談可取計候。若在京ノ家來沙汰筋ニ違背ノ者コレアラハ切腹可申付者也。親施七月十一日ヲ以テ京ニ入り建白ス。天皇嘉納。十三日大和ニ行幸シ。卦傍山陵ヲ拜シ。蹕ヲ春日山ニ駐メ以テ親征ヲ議セント詔ス。會廷臣幕府ヲ援ケ我ノ威望ヲ嫉ム者相ヒ流言シ曰ク此必長藩ノ陰謀蓋シ行幸ヲ待テ禁内ヲ火キ其ノ還幸ヲ沮抑シ東征蹕ヲ箱根山ニ徙シ以テ

罪ヲ幕府ニ問ハントスルナリト。是ニ於テ朝議大ニ我ヲ疑フテ遂ニ十八日堺町門宿衛ヲ罷ムルニ至レリト云フ。同上及忠節事
稿跡是月大ニ前田砲臺ヲ增修ス。忠節事稿跡
 月二日慶親父子勅使下向ヲ以テ山口ニ赴ク。敬親事跡十二日勅使正親町三条公董山口ヨリ赤間關ニ下向ス。十六日阿彌陀寺以東ノ諸砲臺ヲ巡見シ。十八日彦島砲臺ヲ視テ豊前ニ濟リ又留米藩ノ屯營ニ抵

リ赤間關ニ還ル。廿日周防ニ赴ク。上同八月十五日夜奇兵隊兵十餘人先鋒隊ノ屯營裏町教法寺ヲ襲フ。死傷アリ。是ヨリ先キ奇兵先鋒ト隙アリテ使番兼奇兵隊用掛宮城御楯助カ寓教法寺ニ對ス。先鋒朝暮御楯ヲ輕侮シ數之ヲ謾罵ス。御楯憤懣時ヲ疾テ報スル所アラントス。之ヲ奇兵ニ告リ奇兵御楯ノ老成ヲ以テ善ク之ヲ待ツ。御楯ノ戒心アルヲ聞キ若干人ヲ聚ソ

以テ之ニ備フ。先鋒益之ヲ犯ス。遂ニ此ノ事アリ。時ニ定廣赤間關ニ在リ。定廣ノ赤間關ニ抵還ル及ヒ其未詳。兩隊交曲直ヲ訴フ。證左ナシ。事御楯ニ起ルヲ以テ。廿七日ニ至リ。遂ニ死ヲ賜フ。御楯人ト爲リ放縱拘ハラヌ。才アリテ學ナシ。自ラ言フ己ニ學アラシメハ鬼ノ鐵挺ヲ持スルカ如シ。人敢テ當ル者ナカラント。和歌ヲ勝間田盛稔。宍戸真澄ニ學ヒ。當時ノ作家ニ列ス。而シテ甚勤メ

ス唯喫茶ニ耽リ骨董ニ溺レ遂ニ之ヲ以
 テ譴責ヲ蒙ルニ至ル尊攘ノ事起ルニ及
 ヒ奮然志ヲ立テ有志ニ伍シテ周旋ス時
 ニ年不惑ヲ過ク或ハ云フ常榮寺祖溟ヲ
 殺スハ御楯ト游佐勘兵衛ナリト中山忠
 光ノ來奔スルヤ慶親御楯ヲシテ之ニ侍
 セシム蓋シ御楯カ逸才忠光ノ英果過激
 ヲ抑裁スヘキヲ以テナリ果シテ能ク忠
 光ヲ輔翼ス復タ天保弘化年間ノ御楯ニ

アラス而シテ先鋒猶彥助ヲ視ル舊ノ如
 クコノ争鬪ヲ作スコレヨリ先鋒奇兵ト
 益隙アリ没収家筋帳十日幕府使番中
 根市之丞小人目付鈴木八五郎軍艦ニ乘
 シテ赤間關ニ來リ攘夷ノ事ヲ按問ス奇
 兵隊士官吉田秀實年麻呂其ノ軍艦ニ赴キ
 之ニ接ス秀實茲日黒紗帽ヲ戴キ緑襦ノ
 戰袍ヲ穿ツ甚タ威アリ中根等色沮ム秀
 實卒然問テ曰ク府下頃日何ノ劇ヲ演ス

中根等違違答云フ忠臣蔵曰ク觀者奈何
 曰ク麿集ス秀實色ヲ正シ曰ク是他ナシ
 君ニ忠アレハナリ今寡君父子心ヲ勞シ
 吾曹力ヲ盡スモ亦唯天朝ニ忠ニ幕府ニ
 信アラシヲ欲スルノミト因テ大義ヲ執
 リ辨論ス一座低頭敢テ一言スル者ナシ
 秀實終ニ其ノ軍艦ヲ借り攘夷ノ用ニ充
 ント云フ中根等秀實ニ抗スル能ハス勉
 強之ニ從フ忠節事九月五日郡奉行ヲ舊

跡稿

名代官ニ復シ更ニ郡奉行ヲ置ク
 一月林忠助カ祿ヲ奪ヒ其子忠之進ヲ誅
 ス忠助ハ山口ノ人ナリ晩年後妻ヲ迎フ
 後妻忠之進ヲ惡シ忠助ニ譏ス忠助之ヲ
 信シ忠之進ヲ疎斥ス安政中忠助江戸ニ
 于役ス母子留守ス一夜忠之進醉フテ他
 ヲリ歸ル母之ヲ罵辱ス忠之進酒氣激上
 遂ニ堪ル能ハス母ヲ砍殺ス因テ野山獄
 ニ下ル忠之進資性温順獄舎ニ在テ吉田

矩方ニ問學ス。有司其ノ情實ヲ酌量シテ
 久シク罪名ヲ判決セス。コヽニ至テ坂新
 五郎ノ例ニ照シ。士籍ヲ削リ。肆市三日。大
 谷ニ磔ス。事忠助カ艶妻ニ惑溺スルニ起
 ルヲ以テ。忠助カ給祿ヲ没収ス。没収家筋帳渡松集
見聞誌十二月廿四日。薩摩ノ海船赤間關ヲ
 過ク。茲夜暗黒。我兵認ソテ西洋船ノ襲來
 スル者トシ。之ヲ砲ス。彈丸其ノ火藥庫ニ
 中リ。邊崎海ニ燒没ス。敬親事跡見聞誌

元治元年

元治元年二月朔日。毛利元周串崎ヨリ勝
 山古昔且山ト書スノ古城址ニ移居ス。日載十一日。
 慶親山ロヨリ萩ニ來ル。翌日歸ル。敬親事跡三
 月廿七日。三茶實美以下山口ヨリ赤間關
 ニ來リ兵備ヲ觀ル。廿九日。還ル。錦小路賴
 徳病ニ罹リテ留ル。四月廿五日ニ至リ赤
 間關ニ卒ス。同上四月廿四日。定廣萩ニ來ル。
 翌日兵ヲ黒川村ハコ臺ニ調練ス。同上六月
 七日。米利堅船大津郡日置上村ノ黃波戸

浦ニ來ル。砲撃之ヲ却ソク。上同七月八日土

屋振助矢之没ス。三十振字ハ松如。蕭海ト号

ス。佐世某ノ家人ナリ。安藝ノ坂井華ニ遊

學シ。後江戸ニ如キ。羽倉用九ノ塾ニアリ。

學成テ歸リ。塾ヲ開テ子第ヲ教授ス。當時

清水親春カ家人難波周政傳兵衛誠實ヲ以

テ。口羽親之カ家人坂上恒助忠經學ヲ以テ。

振文章ヲ以テ世ノ稱スル所トナル。慶親

三人ヲ拔テ士籍ニ列シ。振ヲ明倫館助教

トス。次テ侍講トナル。尊攘ノ事起リシヨ

リ。因備肥筑等ノ諸藩ニ使ス。政事堂記録

方ヲ兼ヌ。居ル幾ハクナラスシテ免シ。尋

テ病ニ罹リテ終ル。忠節事八月慶親高枚

春風ヲ起シ。赤間關ニ差遣シ。軍事ヲ督セ

シム。春風谷潛蔵ト改稱ス。上同四日佛蘭西

米利堅英吉利和蘭四國ノ軍艦十八隻豐

前田浦ニ來リ碇ス。五日使ヲ差遣シ其ノ

來由ヲ問ヒ。提督ニ接シ曰ク。去歲以來通

航ノ外國船ヲ障ル所以ノ者ハ天子ノ命
幕府ノ令ヲ奉シテナリ。我防長二國ノ人
民外國ニ仇怨アリテ然ランヤ。而ルニ幕
府俄ニ吾ヲ咎ムルニ暴發ノ名ヲ以テス。
其何ノ故ナルヲ知ラス。吾甚之ニ惑フ。而
シテ前日横濱ヨリ歸ル者。貴艦ノ將ニ來
ラントスルヲ説ク。因テ頃朝廷ニ出テ。惑
ヲ決セント欲ストイヘ。氏京師ニ他ノ變
故アリテ。其意ヲ達スル能ハス。貴艦直ニ

赤間關ヲ過クル。我妨ケサルヘシト。提督
言ヲ聽テ半信半疑ノ色アリ。既ニシテ幕
府諸侯ヲ欺クノ理ナシト。使者ヲ擯ソケ。
其ノ三艦長府ニ逼近シテ砲發戰ヲ挑ミ。
餘ハ二行ニ列シ。田浦ニ駢進シ。唯巨艦一
隻埴生洋ニ錨ス。一小艦早鞆ニ進ム。前田
砲臺之ヲ射ス。其艦ヲ破ル。却走ス。又一隻
ヲ砲ス。命中ス。他艦來リ救助シテ去ル。夜
一艦來リ撃ツ。我兵疲勞支ル丁能ハス。彼

上陸我砲ノ火門ニ釘シ且ツ火ヲ民舎ニ
放テテ去ル茲日死スル者六人傷ツク者
五人ノミ六日早天敵艦前田ニ來リ戦ヲ
挑ム是ヨリ先キ山口ヨリ内藤佐渡來リ
赤間關ニ在リ軍事ヲ管シ益田豐前長府
ノ軍ヲ監ス二人畏怯佐渡ハ一宮ニ豐前
ハ二宮ニ退ソク我兵敵ヲ陸ニ誘ヒ且其
艦ヲ淺處ニ膠セシメント欲ス乃チ營ヲ
火キテ各所ニ伏シ以テ待ツ午時敵上陸

ス凡千人許奇兵膺懲二隊及ヒ長府兵逆
ヘ戦フ洋人角石濱ノ竹樹ヲ楯トシ我兵
ハ山ニ據テ力戦ス夜ニ入テ止ム彼此野
宿ス彼ノ敢テ去ラサル者ハ我ノ計リシ
如ク其艦ノ膠シテ拔ケサルヲ以テナリ
我之ヲ襲ハント欲シテ隙ナシ茲日死ス
ル者三十二人傷ツク者五十七人ナリ是
ヲ前田ノ戦トス壇浦彦島ノ兵内藤佐渡
力遁レシヲ以テ守ル丁能ハスシテ砲臺

ヲ捨ツ。敵壇浦ニ上陸ス。我兵山上ニ據テ之ヲ防ク。彼彦島ノ民舎ヲ火ク。七日茶白山ニ在ル我兵敵艦ノ膠スル者ヲ襲ハントシ早飯ヲ炊ク。敵炊煙ヲ望ンテ緊シク茶白山ヲ砲ス。次テ前田ニ壇浦ニ彦島ニ各二艦ヲ來タシ。我砲ヲ奪フテ去ル。其ノ彦島ニ來ル者農夫二人ヲ拘ヘ海上ヲ指シ問フ所アルカ如シ。而シテ語通セス之ヲ送還シ。砲ヲ奪ヘリ。其ノ海ヲ指シ問フ

ハ蓋シ昨日彼ノ一小舢舨流島ニ漂フ。彦島砲臺兵漁船ニ乗シテ之ヲ追フ。其舢舨ニ乗スル者二人我ノ至ルヲ見テ其一ハ海ニ投ス。其一ヲ捕ヘテ之ヲ殺シ。舢舨ヲ碎キ棄ツルヲ以テ。其ニ報ユルヲ告ルナルヘシト云フ。毛利武人登山口ヨリ來リ。彼艦ニ就テ講和ス。時ニ上國ノ警報荐リニ臻ルヲ以テナリ。八日止戦シ。彼此白旗ヲ掲ク。十四日ニ至リ假定約書ヲ交換ス。

敬親事
跡日載

忠節事
跡稿

十月三日慶親父子山口ヨリ萩ニ
 至ル是ヨリ先キ在萩諸士當時政府ノ爲
 ス所ヲ非トシ且諸隊ヲ忌ム幕府ノ問罪
 兵ヲ下スト聞キ清光寺ニ會シ大ニ恭順
 説ヲ唱ヘ曰ク毛利氏天潢ニ分派セリ勤
 王ノ事諸藩ヨリ緩ウスヘカラサルハ固
 ナリ然氏徳川氏ノ息波ニ浴スルモ亦殆
 三百年而シテ粹カニ之ニ背ムキ此ノ如
 キ大難ヲ致ス皆政府ト諸隊ノ爲ス所區

區二國ノカヲ以テ豈能ク天下ニ敵スル
 ヲ得ンヤ今ノ策タル政府ヲ革メ諸隊ヲ
 廢シ百方幕府ニ哀訴懇願シ以テ君主ノ
 罪過ヲ宥ムヘシ事或ハ成ルアラン事若
 シ成ラサルモ君主ヲ廢シ封土ヲ削ルニ
 過キス社稷ハ恙ナキヲ得ント是ニ於テ
 因循ニ安ンシ僥倖ヲ希フノ徒老ヲ扶ケ
 幼ヲ携ヘ滔々之ニ就ク唯其ノ後レニヲ
 恐ル已ニシテ老壯幼ヲ部分シ壯者伍ヲ

結ヒ撰鋒隊ト號ス之ヲ非トスル者目シ
テ俗論黨或ハ清光寺黨ト云フ撰鋒ノ勢
日一日ヨリ盛ニナリコヽニ至テ遂ニ慶
親父子其ノ擁スル所トナレリ乃チ闔藩
恭順ヲ令シ毎戸閉扉セシメ山口館ヲ毀
チ中川宇右衛門小倉源五右衛門山縣與
一兵衛棕梨藤太岡本吉之進等ヲ薦メテ
要路ニ置ク藤太名ハ景治人ト爲リ剛愎
自ラ用ウ斷然慶親父子ノ命ヲ矯メ諸隊

ニ解散ヲ命シ清水親知ヲ幽シ前田利濟
孫右衛門毛利武等ヲ収メテ野山獄ニ下ス勤
王ヲ唱ル者皆坐シテ幽閉セララル羅織甚
密ナリ獨リ谷春風筑前ニ脱走シテ免カ
ルノミ敬親事跡廿三日幕府慶親父子ノ官
位一字稱號等ヲ奪ヒ江戸京師大坂ノ邸
ヲ收メ并ニ支藩主ノ官位江戸邸ヲ收ム
ルノ書到ル因テ慶親ハ敬親敬親定廣ハ廣封
ト改名ス是ヨリ先キ國司親相ノ京師ニ

敗ル、ヤ軍令状ヲ路ニ遺ス。或人之ヲ獲
 テ官ニ上ル。幕府以テ奇貨ト爲シ。誣奏百
 端目スルニ朝敵ヲ以テス。詔シテ慶親以
 下ノ官爵ヲ削奪シ。勅シテ幕府ニ追討ヲ
 命ス。因テ是ノ事アリ。家茂擧ヲ薩肥藝筑
 等ノ二十一藩ニ傳ヘ。諸軍ノ向フ所ヲ部
 署シ。德川慶勝尾張大納言ヲ總督トシ。松平茂
 昭越前守ヲ中軍ニ將トシ。松平康圭三河守ヲ
 後軍ニ將トシ。期ヲ刻シテ我四境ニ蒞ム。

同上十一月十一日。八幡改方ヲ復ス。十

二日。敬親益田親施。福原元佃。國司親相及
 七其參謀穴戸真澄。竹内勝愛。佐久間義濟。
佐兵衛中村清旭九郎ニ死ヲ賜ヒ。志道安房ヲ
 シテ親施等ノ首級ヲ齎ラシ。吉川經幹ヲ
 シテ德川慶勝ノ軍營ニ呈シ。且ツ其參謀
 ノ者ヲ斬スルヲ告ケ。京師暴動ノ罪ヲ謝
 セシム。時ニ慶勝未夕至ラス。尾張藩老成
 瀨正肥隼人幕府目付戸川鉾三郎。藝藩老

淺野某等ト國泰寺ニ蒞ニ首級ヲ檢シ慶
勝ノ至ルヲ待テ之ヲ奉ルト云フ。十
五日中山忠光豐浦郡延行村ニ卒ス。忠光
文久三年八月ヲ以テ兵ヲ大和ニ舉ク。九
月敗レテ來奔シ。赤間關ニ在テ屢夷艦ト
力戰ス。黨議起リシヨリ入アリ忠光ノ所
在ヲ偵フ。蓋シ撰鋒隊ノ使フ所ナリ。諸隊
之ヲ曉リ。忠光ヲ匿ス。忠光憂憤ノ餘酒色
過度遂ニ病ヲ致セリ。綾羅木村ニ葬ル。後

ニ祠ヲ建テ中山社ト云フ。願出 一 十八日
幕府目付戸川鉾三郎。我藩老毛利熙頼隱岐
ニ長防追討ノ達書ヲ附ス。尋テ敬親父子
經幹ヲ以テ陳謝ス。慶勝敬親父子ノ親施
等ノ首級ヲ納シ。參謀ノ者ヲ斬首セシヲ
以テ戰期ヲ止メ。約スルニ敬親父子自判
ノ謝罪狀ヲ上リ。五公卿ヲ出シ。山口館ヲ
毀ツ等ノ事ヲ以テス。敬親 事跡十二月十一日。
敬親父子自ラ咎ヲ引キ。天樹院ニ蟄居ス。

上同十八日。經幹ヲ以テ書ヲ慶勝ニ上リ。追

討達書中ニ國司信濃ニ軍令状ヲ相渡上

ハ軍謀顯然ノ言アルヲ分疏ス。上同十九日。

掠梨藤太等。前田利濟。毛利武大和直利。之國

助。山田公章。助亦。摺崎清義。即彌。八渡邊暢。內藏

松島久誠。剛。野山獄ニ殺ス。忠節事。廿一

日。德川慶勝名代石河佐渡守及ヒ幕府目

付戸川鉾三郎菽ニ來リ。敬親父子ノ謹慎

闔藩恭順ノ状ヲ檢シ。且ツ城内ヲ閱ス。親敬

跡事 廿五日。清水親知ニ自盡ヲ命ス。忠節事

紀元五百五十五年

慶應元年正月二日。德川慶勝敬親父子ノ

謝罪ヲ諒シ。嚴ヲ解ク。敬親。茲夜。谷春風游

擊軍ヲ率井。赤間關伊崎廨舎ヲ襲ヒ。吏ヲ

逐フテ之ヲ奪フ。是ヨリ先キ敬親父子撰

鋒隊ノ擁スル所トナル。諸隊山口ニ據リ。

國是ヲ恢復セントス。而シテ山口ノ地四

達寡兵ノ守ルヘキニアラサルヲ以テ。客

臘十一月十七日。實美以下ヲ護シ。長府ニ

下リ。毛利元周ニ依ル。尋テ長府モ亦嶮要
 ナキヲ以テ。美禰郡ニ入り。伊佐村ニ屯ス。
 獨リ游撃軍赤間關ニ止ル。時ニ政府諸隊
 ニ解散ヲ督促ス。春風是ニ於テ兵ヲ舉ケ。
 討~~討~~檄ヲ發ス。政府大ニ驚キ。變ヲ幕府ニ
 告ケ。敬親父子ヲ城中ニ擁シ。令ヲ國內ニ
 傳ヘ。固ク諸隊ヲ絶チ。粟屋帶刀ヲシテ撰
 鋒隊ニ將トシ。之ヲ撃タシム。出テ美禰郡
 繪堂村ニ陣ス。期ヲ刻シテ赤間關ニ進軍

セントス。六日。伊佐屯在ノ奇兵懲御楯
 等ノ諸隊。春風ノ兵ヲ舉ルヲ聞キ。戰書ヲ
 帶刀ニ贈リ。繪堂ヲ夜襲ス。撰鋒隊伊佐諸
 兵ハ藩命ヲ奉シ。我ニ抗セサル者トシテ
 備ヘス。因テ大ニ敗レ。大隊長財滿新三郎
 戰死ス。新三郎軀幹魁偉。武技ヲ能クシテ
 口辨アリ。隊中ノ仰テ主トナス。所帶刀ハ
 纔ニ門闕ヲ以テ之ニ將タルノミ。
 九日。敬親父子及藩主及ヒ家老ヲ會シ。天

忠節事
 跡稿

朝ニ忠ニ幕府ニ信義ニ祖先ニ孝ヲ盡ス
 ノ國論變換スヘカラサルヲ約ス。敬親事跡十
 三日谷春風山口ニ出鴻城軍ヲ創シ是日
 佐々並ニ來リ戰フ廣封自ラ明木村ニ抵
 リ撰鋒隊ニ諸隊ト講和セン丁ヲ諭ス其
 命ヲ奉セス。同上及忠節事跡稿十四日三條實美西
 三條季知東久世通禧壬生基修四條隆詩
 ヲ筑前ニ送致ス。敬親事跡茲日兩隊大ニ大田
 村ノ河上ニ戰フ萩野隊ノ半隊粟屋帶刀

ニ屬ス其半隊中ニ力士隊アリ必死奮前
 ス諸隊稍却ク山縣有朋在馳セ至リ拔刀
 喝シテ曰ク退ソク者ハ斬ラン隊兵復進
 ム已ニシテ萩野隊彈藥竭キテ退ソク諸
 隊追撃シテ力士隊中有名ノ若稻荷等ヲ
 殪ス。忠節事跡稿見聞誌十六日鴻城軍撰鋒隊ヲ佐
 佐並ニ敗ル。同上廿六日撰鋒隊萩ニ引還ル
 諸隊明木ニ進入ス是ヨリ先キ藩士撰鋒
 隊ノ舉ニ服セサル者川島善福寺ニ會シ

内証ヲ調和セシメテ約ス。號シテ干城隊ト曰フ。敬親父子ニ面謁ヲ乞ヒ。大ニ國事ヲ論シ。棕梨藤太等ヲ退職セシム。撰鋒隊是ニ於テ遂ニ一戦モ捷ヲ取ル。了能ハスシテ班軍ス。市街ノ年少輩麦黒穂ノ唱歌ヲ爲リ之ヲ嘲ル。撰鋒隊屏息敢テ之ヲ叱スルナシ。同上是日西洋船一隻萩洋ニ來リ相島ニ錨ス。廿九日ヲ以テ去ル。尋テ大津郡瀬戸崎ニ來リ泊ス。敬親事跡諸隊將ニ萩ニ

進軍セントス。毛利元純明木ニ在リ停調ス。事諧ハス。三十日廣封自ラ明木ニ馳セ往キ之ヲ諭止ス。同上二月二日廣封ノ男與丸生ル。系圖見瀬戸崎碇泊ノ西洋船帆ヲ揚テ去ル。見聞誌四日諸隊諭旨ヲ奉ス。廣封明木ヨリ還ル。隊兵若干之ニ從ヒ。餘ハ山口ニ班軍ス。同上十一日賊干城隊香川景直半櫻井知章三木冷泉五綏豐五明木ニ暗殺ス。是ヨリ先キ景直等敬親父子ノ命ヲ

奉シ山口諸隊ニ使ス。茲夜山口ヨリ還ル。賊數人之ヲ權現原ニ要シ。籃輿ヲ衝テ斫殺ス。獨リ一行江木清二郎創ヲ蒙リ。輿ヨリ轉シ溪間ニ墮ツ。山中二遁ル。賊認ムルヲ得ス。因テ纜ニ免カル、丁ヲ得タリ。賊三人ノ首ヲ倅坂ノ烏帽子岩ニ置テ去ル。カサガサ

同上及忠節事跡稿 十二日。味爽明木ノ變ヲ傳フ。干城隊萩城ニ入り。城門ヲ鎖シ不虞ヲ警ム。

見聞誌 十五日。敬親村田忠之二即三郎後大津四郎右衛門

ト改ム。 波多野直臣。金吾後廣澤兵助ト改ム。 小田村希哲。素太郎後揖取素夜ト改ム。 瀧厚德弥太郎ヲ野山獄ヨリ出ス。諸隊掠梨黨ノ之ヲ暗殺セシ丁ヲ虞リ。東光寺ニ入レテ警備ス。同上 廿一日。敬親父子先靈社ニ臨時祭ヲ修シ。在萩諸士諸隊ヲ會シ。前過ヲ改メ。同心協力セン丁ヲ誓フ。廿四日ニ至テ畢リ。萩城ノ巖ヲ解ク。

敬親事跡 廿六日。是ヨリ先キ掠梨藤太等山陰ニ出走ス。之ヲ石見ニ追捕シ。本日ヲ以テ

款ニ還ル見聞誌廿七日敬親明木繪堂大田
 等兵禍ヲ被レル諸村ヲ巡視シ直ニ山口
 ニ赴ク敬親事跡三月廿二日廣封山口ニ赴ク
同上廿六日敬親山口ヨリ至ル同上四月十八
 日和製銃及ヒ甲冑ヲ賣リ裝條銃及ヒケ
 ウエールヲ購求スヘキ丁ヲ令ス同上五月
 十二日夜游擊隊兵三人兒玉勘兵衛ヲ其
 ノ椿郷西分玉江ノ家ニ殺ス勘兵衛モト
 游佐氏年少人ヲ傷ツケテ廢セララル尊攘

ノ事起ルニ及ニテ有志輩ニ交リ前過ヲ
 宥ノラレ兒玉某ノ代役ト爲リ游擊軍ニ
 入ル京師暴舉ノ後事ニ托シテ款ニ歸リ
 遂ニ掠梨藤太等ニ因縁シテ其ノ使用ス
 ル所トナル游擊軍大ニ之ヲ憤ルコトニ
 至テ隊兵其家ニ就キ罪状ヲ詰問ス勘兵
 衛語塞リ自殺罪ヲ謝セント乞ヒ隙ヲ覘
 ヒ林下ヲ潛リ逃レントス隊兵之ヲ砍殺
 セリ仕置帳見聞誌閏五月廿八日掠梨藤太中川

宇右衛門ヲ野山獄ニ下ス。同上廿九日小倉

源五右衛門山縣與一兵衛岡本吉之進ヲ

野山獄ニ下ス。毛利元潔三人者ヲ自己ノ

郎ニ來シ敬親ノ命ヲ傳ヘントス。三人者

途ニ自殺ス。與一兵衛獨リ殊セス。家ニ還

シテ療養セシム。創瘡ルニ及ヒテ獄ニ下

ス。六月廿四日獄中ニ病死ス。同上三十日野山獄

ニ於テ中川宇右衛門ニ自盡セシメ。掠梨

藤太ヲ斬ニ處ス。同上六月十九日中井榮次

郎小川八十榎小倉半左衛門南新三郎木

村松之允冷泉太郎兵衛兒玉久太郎ニ自

盡ヲ命シ。及ヒ掠梨カ黨ヲ擯斥スル丁差

アリ。榮次郎ハ掠梨藤太カ二子ナリ。出テ

中井氏ヲ襲ク。實父藤太ノ旨ヲ承ケ。恭順

ニ托シテ異論ヲ主張ス。藤太ノ擯斥セラ

ルニ及ンテ。八十榎等ヲ教唆シ。香川景

直等ヲ明木村ニ暗殺シ。之ヲ諸隊ノ為ス

所トナシ。曲ヲ諸隊ニ負ハシメ。干城隊ヲ

シテ諸隊ヲ討シノントス。干城隊敢テ諸隊ヲ疑ハス。之ヲ撰鋒隊中ニ探索ス。是ニ於テ榮次郎等藤太ト同シク石見ニ出奔ス。既ニシテ縛ニ就ク。按問ノ日自ラ答ヲ引キ。屠腹ヲ懇願ス。敬親情状ヲ酌量シ。其ノ請ノ如クセリ。同上及浪收家筋帳七月朔日。英國船大津郡向津具村ノ大浦ニ來泊シ。翌日ヲ以テ去ル。八月九日。亞國船豐浦郡神田村ノ肥中ニ來泊ス。十五日ヲ以テ去

紀三十五六年

ル。九月朔日復來ル。

二年正月二日。豐浦郡室津浦火アリ。五十戸

社一字。日倉五字。載四月十日。石原村製藥場火ク。同上

五月。英吉利佛蘭西二國ノ船舶屢々赤間

關ニ來泊ス。同上六月十七日。是ヨリ先キ二

日小笠原長行安藝ヨリ小倉ニ抵リ。九州

諸藩ヲ督責シ。兵ヲ門司田浦ニ出ス。其ノ

勢將ニ赤間關ニ進入セントスルカ如シ。

且大島ノ警報至ル。是ニ於テ赤間關在戍

士官書ヲ兩肥筑前久留米柳川ノ五藩ニ
 贈リ小倉藩ノ眾ヲ問フヲ告ケ本日丙寅
 艦癸亥丙辰二艦ヲ率井田浦ヲ撃チ乙丑
 艦庚申艦ヲ率井門司ヲ衝ク陸軍モ亦海
 ヲ濟リ各所ニ戰フ先ツ田浦ヲ敗リ次テ
 門司ヲ陷イレテ凱旋ス同上及十九日松
 山藩ノ探偵ヲ赤間關ニ縛ス同上七月三日
 我兵夜ヲ以テ三貫目砲三門ヲ携ヘテ上
 荷船ニ乗シ幕艦富士山號ニ逼近ス相距

ル終ニ七八間彼更ニ誰何セズ我兵富士
 艦ノ汽鐘ヲ狙撃ス艦内騷擾彈丸ノ命中
 セシカ如シ我兵上荷船ヲ棄テ輕舸ニ乗
 シテ遁ル是ノ砲聲ヲ期約シ彦島砲臺大
 里ヲ遠射シ陸軍機ニ乗シテ海ヲ濟ル丙
 寅庚申丙辰三艦大里洋ニ錨シ砲撃勢援
 ス陸軍敵ノ三砲臺ヲ陷ル是時敵艦二隻
 來援ス我三艦逆撃之ヲ走ラス陸軍凱旋
 ス申時幕艦彦島ニ來リ砲ス應セズ暮ニ

至テ去ル。同上廿七日。是ヨリ先キ我兵海ヲ
 濟リ大里ニ屯スル者。小倉兵ノ出テ戰ハ
 サルヲ以テ。是日我ヨリ進戰セント諸艦
 及ヒ彦島砲臺ニ際ス。本日昧爽彦島砲臺
 大里ノ西ヲ遠射ス。應セス。蓋敵既ニ遁レ
 シナリ。既ニシテ幕艦山床砲臺ノ前面ニ
 來リ砲ス。我艦之ヲ逆へ撃ツ。彼福浦ニ退
 ソク。我艦追ハス。次テ富士艦來リ彦島ヲ
 遠射シテ小倉ニ退ソク。申時幕艦三隻來

リ彦島ヲ砲シ。一艦赤間關ニ赴カントス
 ルカ如シ。我砲臺及ヒ康申癸亥乙丑ノ三
 艦之ヲ交射ス。敵艦狼狽。赤間關ヲ過ント
 ス。我艦之ヲ追ヒ。壇浦砲臺モ亦逆射ス。彼
 僅ニ免カレテ叢島ヲ指シテ去ル。是ヨリ
 先キ陸軍海ヲ濟リ。新町ニ進ンテ之ヲ取
 リ。次テ延命寺ノ砲臺ヲ拔キ。赤坂ニ戰フ。
 敵兵必死拒戰ス。我兵山田鵬介等其ノ殪
 ス所トナル。遂ニ之ヲ拔ク了能ハス。

ニ班軍ス。廿八日赤坂ニ進之。戰ヲ挑ム。應
 セス。之ヲ探レハ敵已ニ遁ル。因テ其砲臺
 ヲ毀テテ還ル。上同八月朔日。小倉城黒煙ヲ
 發シ。富士艦西ヲ指テ駛走ス。輕舸之ヲ追
 フ。近ソクニ及ニテ富士艦銃シテ之ヲ拂
 フ。輕舸若松港ニ退ソク。次テ小倉軍艦佐
 賀關ヲ指テ走ル。其ノ何ノ故タルヲ知ラ
 ス。午時ニ及ニテ小倉城火アリ。煙焰天ニ
 漲ル。二日。我海陸軍進ニテ小倉城ヲ收ム。

土人云フ。藩主幼少ナルヲ以テ之ヲ肥後
 ニ托シ。末藩小笠原近江守貞本城ヲ守ル。
 既ニシテ小笠原壹岐守來リ諸軍ヲ督シ
 テ戰フ。利アラズ。壹岐守意氣挫折ス。藩士
 壹岐守ヲ責メ曰ク。諸藩我ヲ助ケス。閣下
 ノ令ヲ承ケテ戰フ者ハ。獨リ肥後藩ノミ。
 閣下自ラ出テ長兵ヲ卻ソケヨト。壹岐守
 之ヲ肥後兵ニ謀ル。肥後人曰ク。我ノ赤坂ヲ
 守ルモノハ。我藩祖ノ墳墓安達山ニ在ル

ヲ以テナリ。遠國ノ兵如何ソ小倉ノ全地
ヲ守禦スル丁ヲ得ンヤ。閣下自ラ畫策セ
ヨト。遂ニ赤坂ヲ棄テ。安達山ノ祖靈ヲ奉
シテ肥後ニ還ル。壹岐守爲ス所ヲ知ラス。
富士艦ニ乘シテ遁ル。藩老小官民部之ヲ
追フ。壹岐守拒ンテ之ヲ銃ス。是ニ於テ民
部等城ヲ火キテ香春ニ奔レリト。是ヨリ
我兵小倉領内各所ニ戰ヒ。十一月十一日
湯川ニ進撃セントス。時ニ薩肥ニ藩小倉

紀三五五七年

藩止戰ノ依頼ヲ納レ。使介ヲ遣ハシテ停
調ス。十三日。野村素介。薩人三雲藤五郎。肥
人秋吉久右衛門。小倉藩老島村志津磨ノ
下役山内武夫ニ小森村ニ接見ス。十二月
廿八日。和議成ル。小倉藩老六人連署ノ誓
書ヲ納レ。末藩小笠原近江守モ亦書ヲ贈
リ。親睦ヲ約シ。企救一郡ヲ我ニ預ク。上同
三年正月十二日。小倉藩使ヲ遣ハス。廿三
日。吉敷郡小郡ニ於テ廣澤真臣。小田村希

哲之ニ接ス。見聞誌四月十四日。谷春風赤間
 關ニ没ス。春風字ハ暢夫。本氏高叔。通稱晋
 作。幼ヨリ不群。言談壯快。人望テ其食牛ノ
 氣アルヲ知ル。初メ好テ小詩及ヒ俳句ヲ
 作ル。已ニシテ廢棄シ。惟兵書ヲ以テ務ト
 ス。年十九。贊ヲ吉田矩方ニ執ル。矩方既ニ
 久坂通武ヲ稱シテ年少奇才。國士無雙ト
 ス。春風ヲ獲テ大ニ喜ヒ。以テ通武ノ佳對
 ト爲ス。而ルニ春風事ヲ處スル。才ニ任シ

自ラ用井。問學ヲ勤ノス。其言行不羈馳騁。
 通武ハ學藝既ニ老成ノ槩アリ。故ニ矩方
 屢通武ヲ揚ケ以テ春風ヲ抑ユ。春風憤發。
 幾ハク無クシテ學業大ニ進ム。是ニ於テ
 矩方事ヲ議スル。毎ニ多ク春風ヲ引ク。通
 武モ亦言フ。晋作及フヘカラスト。春風之
 ヲ聞テ曰ク。久坂子ハ天下ノ奇傑。我奚ソ
 之ト抗スル。丁ヲ得ンヤト。矩方悦テ曰ク。
 二生此ノ如シ。國家ノ寶ナリ。春風通武其

庫ヲ同クス。人稱シテ聯壁ト爲ス。文久元
 年定廣ノ近侍ト爲ル。其年十二月幕吏上
 海ニ如ク。敬親春風ヲシテ隨行以テ其形
 勢ヲ謀ハシム。旅資五百兩ヲ賜フ。春風長
 崎ニ到リ。幕吏ニ會ス。解纜ノ期延テ明年
 三月ニ在リ。春風謂ラク。幕吏ト交リテ三
 月ニ至ル。則チ五百金將ニ此地ニ揮霍シ
 テ足ラサラントス。而レ氏之ヲ他方ニ待
 ツモ亦嫌疑アリト。其資三分ノ一ヲ以テ

屋ト妓トヲ買ヒ。三月ニ至リ之ヲ賣ルヲ
 約ス。因テ多金ヲ費サス。明春上海ニ航シ。
 八月復命ス。其冬江戸ニ游學シ。久坂通武
 等ト謀テ御殿山ノ洋館ヲ焼ントス。事泄
 レテ果サス。京師ニ逃亡シ。三年五月款ニ
 歸ル。敬親其罪ヲ問ハス。春風惶懼。幽閑シ
 テ自ラ責ム。六月赤間關ニ事アリ。敬親春
 風ヲ起シテ赴キ援ケシム。春風建議シ。奇
 兵隊ヲ編ス。門地ヲ問ハス。士庶ヲ論セス。

一ニ强健者ヲ選テ之ニ充テ其餼廩ヲ厚クシ其賞罰ヲ明ニス。是ニ於テ兇險亡頼ノ徒其牙角ヲ折リ之カ用トナル。實ニ我藩諸隊ノ濫觴ナリ。十月廣封ノ奥番頭ニ擢ラル。元治元年三月麻田翼ト大ニ時事ヲ論ス。議合ハス。春風憤懣髮ヲ削リ名ヲ東行ト改メテ京師ニ走リ。通武等ト王事ヲ勤メントス。通武等之ヲ拒ミ責ムルニ其職ヲ曠クスルヲ以テス。春風大ニ寤ミ。

西還シテ野山獄ニ下ル。八月西洋諸國大舉赤間關ニ來寇ス。敬親春風ヲ起シ復赴キ援ケシム。谷潛藏ト改稱ス。是時髮未夕長セス。槎枒粟殼ノ如クニシテ。綺服錦袴。手蛇睛傘ヲ持シ。足高跟履ヲ穿テ。稻荷街ノ絃妓數名ヲ拉シ。高ク伊勢曲ヲ唱ヘ。舞踏シテ營ニ入ル。一營大ニ駭ク。初メ春風ノ奥番頭トナル。赤根武久之ニ代リ奇兵ヲ督ス。春風至ルニ及シテ威權即日春風

ニ歸ス。是年十月恭順黨起リ、勤王ヲ唱ル者皆網打セラル。春風山口ニ在リ、過所ヲ密取シ、自己ノ名字ヲ書シ、急使ヲ奉スルト稱シ、扛夫ニ金若干ヲ與ヘ、輿ヲ飛シテ、抑井田關ヲ經過シ、赤間關ニ到ル。奇兵隊止ランヲ請フ。春風曰ク、我別ニ一策アリト。去テ筑前ニ赴ク。已ニシテ赤間關ニ還ル。是時恭順黨強專、諸隊ニ解散ヲ命ス。是ヨリ先キ諸隊山口ヲ退ソキ、美禰郡伊佐

ニ屯シ、游擊軍獨リ赤間關ニ在リテ、赤根武人兩端ヲ懷キ、諸隊方ニ瓦解ノ勢アリ。春風伊崎廨舎ヲ襲ヒ、其糧仗彈藥ヲ奪ヒ、勢ニ乘シテ山口ニ入り、伊佐ノ諸隊ト掎角シテ、恭順黨ヲ攘ハントス。武人之ヲ拒ミ、衆モ亦頗ル遲疑ス。一日春風大ニ恚テ曰ク、國家ノ危急迫レリ、豈常禮ニ拘テ猶豫スルノ時ナランヤ。子等往カスニハ、我ト人大呼以テ之ヲ奪ハン。子等ハ則チ手

ヲ拱シテ俗黨ノ戮ニ就ケ。是モ亦國家ニ
報ルナリト。衆遂ニ臂ヲ攘ケテ起テ。其夜
伊崎廨舎ヲ襲ヒ。吏ヲ逐フテ之ヲ奪フ。實
ニ乙丑正月二日ナリ。乃チ討奸檄ヲ作り
兵ヲ募ル。是ニ於テ恭順黨敬親父子ノ命
ヲ矯メ。兵ヲ繪堂村ニ出ス。伊佐氏在ノ諸
隊春風ノ兵ヲ舉ルヲ聞キ。繪堂ヲ襲フテ
之ヲ敗ル。春風山口ニ入り。鴻城軍ヲ創シ。
黨兵ヲ佐々並ニ撃テ。之ニ克ツ。二月遂ニ

國難ヲ鎮ム。初ノ黨兵ノ繪堂ニ出ツル。其
旗號一字三星。隊兵之ヲ望シテ頗ル沮ム。
春風哂テ曰ク。彼賊ナリ。猶一字三星ノ徽
號ヲ用ウ。我今彼ノ賊ヲ討ツ。之ヲ用ウル
ニ於テ何カ有ラント。命シテ一字三星ノ
旗ヲ作ル。衆氣大ニ振フ。一字三星ハ毛利
氏ノ徽號ナリ。二年六月。幕軍境ニ蒞ミ。大
島郡ヲ侵ス。警報赤間關ニ至ル。春風丙寅
艦ニ駕シ。竊ニ大島ノ東ニ繞リ。幕艦ノ中

央ニ突入シ。砲ヲ發シテ之ヲ撃ツ。幕艦驚
駭措ヲ失ス。春風戀戰セス。汽煙ヲ激シテ
豊後洋ニ駛走シ。舳ヲ轉シテ赤間關ニ歸
ル。幕艦之ヲ逐ハントス。既ニシテ以為ク
薩藩來リ長ヲ援ケ。我ヲ誘クナリト。乃チ
止ム。是ヲ以テ室津以西ノ海濱兵禍ヲ免
カル。丁ヲ得タリ。閱五日兵ヲ出シテ小
倉ヲ撃ツ。烏帽直密。胡床ニ踞シテ指揮ス。
威風煥發儼トシテ一國侯ノ如シ。既ニシ

テ足立山下ニ戰フ時。便服シテ軍ニ臨ム。
或曰ク。盍ツ戎服セサル。春風微笑シテ尾
張扇ヲ搖シ曰ク。鼠輩ヲ破ル是ニシテ足
矣。コ、ニ至テ病没ス。享年終ニ廿九歳ナ
リ。忠節事跡
稿見聞誌十月三日。廣封赤間關ニ來リ。
海陸軍ヲ勞ス。日載見
聞誌十六日。萩城三郷内
火アリ。有地藤馬宅失
火。延燒五戸。十一月六日。毛利
元周軍艦ヲ購求ス。滿珠艦ト名ツク。上同十
二月。澤宜嘉東上ス。見聞
誌

紀元三五九年

今上天皇明治元年正月廿二日敬親萩ニ來

リ二月十一日山口ニ還ル

敬親
事跡

四月清末

大雨洪水ス

願出
件記録

二年四月十八日中村任伊波没ス任字ハ文

淵牛莊ト號ス幼ヨリ學ヲ好ム稍長シテ

山田時文

運平熊毛郡三丘ノ人北海ト号ス

ヲ師トス寛政

十二年明倫館ニ入り繁澤規叔

權右衛門
豐城ト号

スニ從學ス文化十四年撰ハレテ其身一

代儒者ニ班セララル初メ護園ノ學ヲ修ス

後其ノ非ヲ悟リ專ラ程朱ヲ主トス經ヲ

講スル能ク大義ヲ明ニシテ章句ヲ事ト

セス天保ノ初學校講官ト爲リ尋テ齊元

ノ侍讀ト爲ル敬親立ニ及シテ復侍讀ト

スコレヨリ從駕江戸ニ役スル丁數年嘉

永五年明倫館祭酒ニ拜ス安政二年復東

行ノ命アリ老テ遠役ニ勝サルヲ以テ職

ヲ辭ス敬親之ヲ允ス而シテ格式舊ニ依

ラシム元治元年正月致仕スコトニ至テ

没ス年八十有七任入ト爲リ朴素華美ヲ
 喜ハス善諷能ク人ヲ諭ス樂シテ人ノ善
 ヲ道ヒ其ノ惡ニ及ハス業餘書畫ヲ善ク
 ス右手不良之ヲ作ル左手ヲ以テス又好
 シテ詩ヲ賦ス然レ氏隨テ作レハ隨テ散
 シ稿ヲ留メス敬親ニ侍スル丁數十年寵
 遇優渥恩賚最多シ明治戊辰敬親ノ山口
 ヨリ萩ニ來ルヤ一日任カ門ヲ過キ駕ヲ
 駐メ任ヲ召シ安ヲ問ヒ老ヲ勞シ酒及ヒ

魚ヲ賜フ特例ナリ人以テ榮トス本年復
 養老ノ資ヲ賜フ其ノ終ラントスル敬親
 之ヲ聞テ金ヲ賜フ命至ル既ニ死スル一
 日ナリト云フ見聞誌六月十七日是ヨリ
 先キ敬親父子藩籍ヲ奉還センコトヲ願フ
 茲日天皇之ヲ允ス事既ニ周防ノ部ニ詳
 カニセリ

山口縣史略卷第六終

明治十五年十月廿六日板權免許
明治十六年二月出版

定價三十錢

著者

山口縣士族

近藤清

周防國吉敷郡山口
八幡馬場十番地居住

同縣平民

宮川臣吉

周防國吉敷郡山口
中市町六番地居住

出版人

